

【 追 悼 】

追悼 高石哲男先生

尊敬できる無比の恩師がとうとう亡くなられた。授業を受けたわけでもなく、また大学で師弟あるいは上下関係にあったわけでもないが、学問の師は？と聞かれれば僣越ながら高石哲男先生のお名前を挙げたい。

1970年代の終わり頃だったと思う。当時、東京大学生産技術研究所に勤務していた居た私に、高石先生からいきなり「手を抜いたな」という電話がかかってきた。一瞬何のことか分からなかったが、学生と連名で投稿した論文がたまたま先生の所へ査読が回ったようで、その一言はきつかった。確かに多くの学生などと一緒に仕事をしていたり修了要件がかかったりして手抜き論文だったが、まさか高石先生の所に査読がいくとは。最終的にはパスさせていただいたが、「天網恢々疎にして漏らさず」と肝に銘じた次第である。

先生のことを初めて識ったのは東京オリンピックで沸く1964年夏のことである。日本化学会の講習会で「化学者のための群論」というのがあり、講師と聴講生であった。習った内容のことは何も記憶にないが、後日その話をすると時たま見せる例の照れた様子で「そんなことも有ったかな？」ということだった。次の機会は1970年秋、やはり日本化学会の講堂だったと思う。その年の9月にアメリカの「Worcester」で第二回ゼオライト国際会議があり、日本から筆者を含めて5名が参加した。小泉光恵阪大教授、加藤忠蔵早大教授（いずれも当時）などである。学会は「Worcester Polytechnic Institute」の講堂紛いなどで行われた小さな規模のものであり、未だ天然ゼオライト研究発表の割合がかなり高かった。しかし、Mobil社でのゼオライト触媒の開発がすでに行われており、合成ゼオライトの利用が世界的に急増していった時期である。帰国したらどこの主催かは記憶がないが国際会議の内容概要の講演会が企画され、筆者が合成ゼオライト関係の触媒・吸着などを分担した。その会場で質問攻めにあった相手が高石先生であった。若輩相手にも関わ



豊橋技術科学大学での最終講義（1988年3月）。

らずゼオライトの構造・性質などへの種々の疑問や世界（学会）の動向などを聞かれたように記憶する。ゼオライトの熱測定解析で博士号を取得した生意気盛り（多分）の若輩であったが、質問相手が6年前の群論の講師と認識したかは定かではない。先生はそれまではアルカリハライドへの吸着の研究が主であったはずだが、吸着研究の材料としてのゼオライトに興味を持たれた時期ではないかと思う。まだ立大原研に勤務されていた頃でその後時たまフラリーと六本木の東大生研に來られて研究の話がされたが、ゼオライトの有す規則性構造に伴う特異な吸着能やそれらに及ぼす各種因子の効果の可能性などユニークな着想の話が多くまさに「目から鱗が落ちる」思いの連続で「モレキュラーシーブ4.5A」の合成などはその頃聞いた話である。

1973年に第三回ゼオライト国際会議がチューリッヒで行われた。記憶に間違いがなければ先生は会議後にイギリスに渡り当時「Imperial College」に居られたBarrer教授を訪ねられて、以降その交流は教授が亡くなられる迄続いていた。Barrer教授の方が10歳余年長と思うが、お二人の会話を何回か傍で聞いていた限りお互い研究者として認め合っている関係であることが羨ましい感じであった。



南仏での国際吸着会議にて (1998年5月)。

先生は1978年に新設の豊橋技術科学大学に異動され、3年後に私も縁あって同じ大学に異動した。異なる講座ではあったが、それから先生の定年までの10年間はずっと刺激的な年月であった。ゼオライトという共通のキーワードでの話題は勿論、戦時下の旧制高校でバルザックの「谷間の百合」を愛読したとか意外な面も知ることが出来た。大学であるから事務的な管理運営の仕事もあるわけだが、多分好きではなかったと思う。しかし、無私であること故に担がれることも多く口にチャックをすることをしない方だし、俗世間から隔絶されているように見える大学というところでも、権力をうまく操作し世渡りのうまい人間が跳梁跋扈することも多く品の良い世界ではない故、楽しくはなかったに違いない。毀誉褒貶相半ばするとまではいかなくとも、先生をなにかと非難しようとしたりないがしろに扱おうと

する人間の醜さがよく分かった。それと同時に先生の人を見る眼の確かさも実感した。

ここまで追悼記を書きながら「いつかどこかに書いたような文章」と考えてみたら、先生の喜寿の祝いの拙文があったことを思いだしたり。事務局に依頼し取り寄せてみたら、同じような文章を書いているがご容赦願いたい。祝い文には先生の仕事や共同で行った仕事のことも記載しているので、ここでは省略する。簡単に記せば、先生のゼオライト関係の仕事は一次元あるいは二次元の制限空間内での分子の吸着挙動を「精密に」測定し統計力学的手法を駆使して、今でいう「ナノポア」内でのイオンの分布や欠陥の存在が吸着・反応にどう影響するかを解析したことにある。実験の精緻さは感嘆すべきものであった。

掲載の写真は豊橋技術科学大学での最終講義のものだが、その講義の最後に「自分の残した研究は堤がやってくれると思う」と言われたことは大変名誉なことではあったが、結果としては先生のご期待の高々1/10を達成できた程度であろう。私自身大学人の最後の数年からは「高等教育国際協力」の世界に入ってしまったが、これをどう思われていたかは分からない。人づてに心配されている事を聞いたことがあるが、直接伺ったことは無くその機会も永久に失われてしまった。

文 献

- 1) 堤 和男, ゼオライト, **16** (3), 110 (1999).

豊橋技術科学大学名誉教授 堤 和男